ISSN 2186 − 3989

# 『日本詠物詩』花部注釈（3）

任　穎

The Annotation of Nihon Eibutsushi's Hana Bu(3)

Ying Ren

北　陸　大　学　紀　要
第48号(2020年３月)抜刷

北陸大学紀要
第 48 号（2019）
pp.137～145
〔研究ノート〕

# 『日本詠物詩』花部注釈（3）

任　穎*

## The Annotation of *Nihon Eibutsushi*'s Hana Bu(3)

Ying Ren *

*Received November 1, 2019*

## Abstract

The number of plant and animal poems which were produced in the Edo Period is very large, with many of them possessing very rich and expressive prose. In 1776, *Nihon Eibutsushi* was published. It was the first anthology of poems about plants and animals in the history of Japanese poetry. In *Nihon Eibutsushi*, the Sakura poems are in front of the plum poems. This annotation exhibits the 21th to the 40th Japanese kanshi about flowers in *Nihon Eibutsushi*. By doing so it may be observed that at the end of the Edo period, poems about flowers had begun to evolve from a Chinese style to a unique Japanese style.

Key word: Nihon Eibutsushi , Edo Period , Japanese poetry

## はじめに

日本最古の漢詩集『懐風藻』の中には、すでに物を詠う詩いわゆる詠物詩が 8 首見られる。また、平安初期の勅撰詩集『文華秀麗集』の中には、遊覧・宴集・贈答・楽府・雑詠・梵門などの部立が見られ、詠物詩と思われる作品は「楽府」部 4 首、「雑詠」部 48 首が収められている。「楽府」部に収められた嵯峨天皇の「梅花落」と菅原道眞の「奉和梅花落」は初めて梅を主題として詠った詩である[1]。

次に、五山の僧侶も詠物詩を愛誦している。彼らの作品は主に中国の詠物詩の影響を受け、平安時代よりも数が多く見られる。さらに、江戸時代に入ると、中国から詠物詩選が多く伝えられ、『六代詠物詩纂』『佩文斎詠物詩選』『詠物詩選』などが翻刻され、詩人たちの詠物詩の手本ともなっていた。またその頃、京坂詩壇では詩を作る詩社という文人たちのサロンが多く結成されており、例えば京都の江村北海の賜杖堂や大坂の片山北海の混沌社などが見られる。中国の六朝時代に文人たちが「物」を題として詠い、詩才を競い合ったように、江戸の詩人たちも詩社でしばしば詠物詩を詠っていたのである。したがって、江戸時代には詠物詩の数は非常に多くなり、表現も豊かになっている。そのため、伊藤栄吉[2]が当時の詩人たちの詠物詩を収め、アンソロジー『日本詠物詩』が刊行されたのである。

*北陸大学国際交流センター（天津外国語大学交流教員）International Exchange Center, Hokuriku University

## 『日本詠物詩』について

『日本詠物詩』は安永 5(1776)年に編成し、翌年安永 6(1777)年の春に刊行された。所収の作者は 134 名で、詠物詩の作品は 546 首が見られる。その目次には次のような項目が立てられ、詠物詩を 26 部に分類して収めてある。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 天部 | 43 | 玉帛部 | 5 |
| 地部 | 3 | 冠服部 | 4 |
| 山部 | 11 | 飲食部 | 19 |
| 水部 | 12 | 菓部 | 10 |
| 居処部 | 2 | 蔬部 | 5 |
| 寺観部 | 3 | **花部** | **124（附録 10）** |
| 人部 | 13 | 木部 | 32（附録 9） |
| 麗人部 | 23 | 草部 | 12 |
| 文部 | 10 | 禽部 | 71 |
| 武部 | 3 | 獣部 | 15 |
| 楽部 | 6 | 鱗部 | 12 |
| 器用部 | 56 | 水族雑部 | 1 |
| 雑玩部 | 9 | 昆虫部 | 23 |

詠物詩の分類や収録基準などに関しては、冒頭の「凡例」の中で、すべては清の兪長仁の『詠物詩選』に基づいたものであると述べている。特に注目したいのは、「花部」124 首（附録 10 首）が梅からではなく、桜から始まることである。また、「花部」の編成を探ってみると、桜、海棠、梅花の次に、桃花、梨花、藤花など、日本に馴染みの深い花が見られる。しかし、中国の詠物詩集や詩人たちの詠花詩に良く詠まれる蘭や菊、牡丹などの花は比較的に少なく、また後のほうに並べている。本稿では、『日本詠物詩』の「花部」124 首（附録 10 首）の漢詩について注釈を施し、それらの漢詩がどのような基準で選ばれ、またどのような面において、日本の詠物詩としての特徴が見られるかについて検討したい。さて、本稿は前掲の「『日本詠物詩』花部注釈（1)」および「『日本詠物詩』花部注釈（2)」に続き、「花部」の第 31 番から第 40 番の作品の注釈を取り扱うこととしたい。

31 世粛夜集同咏瓶中紅白梅　　世粛夜集(いた)り同じく瓶中の紅白梅を咏ず

釋顕常

今年花太晩、二月向瓶看　　今年花太だ晩(おそ)し、二月瓶に向ひて看る

綽約朱唇解、離披玉蕊殘　　綽約(しゃくやく)として　朱唇解け、離披(りひ)として　玉蕊(ぎょくずい)殘る

幽香移自動、清露折将乾　　幽香(ゆうこう)　移り自ら動き、清露(せいろ)　折(くだ)けて将に乾かんとす

虢国元嫌粉、石家故貯珊　　虢国(かくこく)　元と粉を嫌ひ、石家　故ら珊を貯(たくは)ふ

翻疑砕来斗、更問煉成丹　翻(かえっ)て疑ふ　砕(くだ)ぎ来たりし斗かと、更に問ふ　煉り成りし丹かと

洛北曾凝雪、江南尚怯寒　洛北(らくほく)　曾つ雪を凝らし、江南(こうなん)　尚ほ寒を怯(おそ)る

不須隴信送、勿使春心闌　隴信の送るを須(もち)ひずして、春心をして闌(たけなは)ならしむること勿れ

衰鬢臨堪愧、酔顔映可寛　衰鬢　臨みて愧づるに堪へ、酔顔　映じて寛す可し
以瓊君各得、爲絢我何難　瓊を以て　君各得り、絢を爲すこと　我何ぞ難からん

此夕休吹笛、羅浮夢頼安　此の夕　笛を吹くことを休めよ、羅浮(らふ)　夢頼に安(やす)し

［注釈］
○世粛　木村兼葭（1736～1802）の字。
○綽約　やさしくて美しいさま。しとやかなさま。荘子『逍遥遊』に「肌膚若冰雪、綽約若處子」とあり、司馬相如「上林賦」に「便嬛綽約、柔橈嫚嫚」とあり、白居易「長恨歌」に「樓閣玲瓏五雲起、其中綽約多仙子」とある。
○離披　はなれ開く。又、花が十分に開く。『楚辭』宋玉九辯に「白露既百草兮、奄離披此梧楸」とあり、杜甫「陪鄭廣文遊何將軍山林」に「露翻兼雨打、開拆漸離披」とあり、白居易「冬夜」に「冷落燈火暗、離披簾幕破」とあり、李商隠「七月二十九日崇讓宅讌作」に「浮世本来多聚散、紅蕖何事亦離披」とある。
○玉蕊　玉の精をいう。神仙の食うもの。ここでは花の蕊のことを指す。庾闡「遊仙」に「朝餐雲英玉蕊、夕挹玉膏石髓」とあり、曹唐「小遊仙」に「風滿塗山玉蕊稀、赤龍閑臥鶴東飛」とある。
○幽香　奥ゆかしいにおい。温庭筠「東郊行」に「綠渚幽香注泊蘋、差差小浪吹魚鱗」とあり、王安石「歳晚」に「俯窺憐綠浄、小立佇幽香」とある。
○清露　清らかなつゆ。張衡「西京賦」に「立修莖之仙掌、承雲表之清露」とあり、阮籍「詠懐」に「清露被皋蘭、凝霜霑野草」とあり、沈佺期「長門怨」に「漆露凝珠綴、流塵下翠屏」とある。
○虢国夫人　唐、楊太眞の姉。太眞に姉大姨を封じて韓国夫人、三姨を虢国夫人、八姨を秦国夫人とし、同日に拝命す。虢国夫人は妝粉を施さず、自ら美艶を衒い、常に素面で天子に朝したという。杜甫「虢国夫人」に「虢国夫人承主恩、平明騎馬入宮門」とあり、『楊太眞外傳』上に「封大姨爲韓国夫人、三姨爲虢国夫人、八姨爲秦国夫人、同日拜命、皆月給錢十萬、爲脂粉之資、然虢国夫人不施粧粉、自衒美艶、常素面朝天」とある。
○江南　楊子江以南の総称。江蘇・安徽・江西三省の通称。杜甫「社日」に「今日江南老、他時渭北童」とあり、李商隠「柳」に「江南江北雪初消、漠漠輕黄惹嫩條」とある。
○洛北　洛水の北。『唐書』李密傳に「煬帝遣王世充、選卒十萬擊密、世充營洛西、戰不利、更陳洛北」とある。
○羅浮　広東省増城県の東。博羅県の界にまたがり、東晋の葛洪が仙術を得たところと伝える。南漢の劉鋹は、かつて天華宮を山中に建てた。山麓は梅の名所として古来名高い。蘇軾「松風亭下梅花盛開再用前韻」に「羅浮山下梅花村、玉雪爲骨冰爲魂」とある。
○釋顕常　享保４年（1719）～享和元年（1801）。法諱顕常、道号大典、字は梅荘である。号は蕉中・東湖・不生主人など、俗姓は今村、通称は大次郎、江戸中期の禅僧（臨済宗）。近江の人である。大典八才の時、父に従って京に出、黄檗山華蔵院に入ったが、すぐ相国寺慈雲院に移り、独峰慈秀のもとで剃髪、独峰の侍者となった。これより独峰から訓育を受ける傍ら、京に滞在中の大潮元皓（黄檗僧・詩人）に詩文を学び、京の名儒宇野明霞に

ついて、経学を修めた。著に『唐詩集解』7 冊、『小雲楼稿』6 冊、『北禅文草』2 冊、『北禅詩草』2 冊、『北禅遺草』4 冊がある。

32　緑蕚梅　　緑蕚梅

伊藤縉

澹烟微雨立疎籬　　澹烟　微雨　疎籬に立つ

緗采含香朶朶宜　　緗采　香を含みて朶朶宜し

月裏誰裁青玉案　　月裏　誰か裁す青玉案

風前自惜翠雲姿　　風前　自ら惜しむ翠雲の姿

名傳金谷魂空化　　名は金谷に傳りて　魂空く化し

怨入蒼梧鬓欲垂　　怨は蒼梧に入りて　鬓垂れんと欲す

庾嶺萬株花似雪　　庾嶺　萬株の花を雪に似たり

東君更復闘新奇　　東君　更に復た新奇を闘はす

［注釈］

〇微雨　こまかな雨。こさめ。陶潜「讀山海經」に「微雨從東來、好風與之俱」とあり、韋應物「幽居」に「微雨夜來過、不知春草生」とある。

〇疎籬　まばらな垣。杜甫「風雨看舟前落花戲爲新句」に「江上人家桃李枝、春寒細雨出疏籬」とあり、白居易「小宅」に「小宅里閭接、疎籬雞犬通」とある。

〇青玉案　青い玉案。玉案は美しい机。

〇翠雲　みどりのくも。碧雲。『後漢書』馮衍傳下に「駟素虯而馳騁兮、乘翠雲而相佯」とある。

〇金谷園　晋の石崇の園の名。河南省洛陽県の西北。石崇が金谷園に賓客を会して、大いに飲み、詩を賦させてできないものには罰として酒三斗を飲ませた故事がある。

〇庾嶺　山名。梅花の名所、一名、梅嶺・大庾嶺。江西省大庾県。『聞見近錄』に「庾嶺險絶、通渠流泉、涓涓不絶、紅白梅夾道、仰視青天、如一線然」とあり、伯顔「過梅嶺岡留題」に「馬首經從庾嶺回、王師到處悉平夷」とある。

〇新奇　あたらしくめずらしい。

〇伊藤縉　宝永 7 年（1710）～安永元年（1772）。名は縉、字は君夏、号錦里・鳳陽、通称は荘治・宗太郎。京都の人。江戸時代中期福井藩の儒者。伊藤竜洲の長男。父に学び、その跡を継いで元文 3 年（1738）に越前福井藩の儒官となる。錦里は経学、北海は詩文、儋叟は文章で世に聞こえ、伊藤家の三珠樹と言われた。著に『激翠館雑記』10 巻などがある。

33　緑蕚梅　　緑蕚梅

釋元養

群媛玉立羅浮鄉　　群媛玉の如く立つ羅浮の鄉

孰是雙蛾第一粧　　孰是れか雙蛾第一の粧ならん

| | |
|---|---|
| 惱殺洞宮三十六 | 惱殺(のうさつ)す　洞宮(どうきゅう)の三十六 |
| 月明輕曳碧雲裳 | 月明にして　輕く曳(ひ)く碧雲(へきうん)の裳 |

［注釈］
○羅浮　広東省増城県の東。博羅県の界にまたがり、東晋の葛洪が仙術を得たところと伝える。南漢の劉鋹は、かつて天華宮を山中に建てた。山麓は梅の名所として古来名高い。蘇軾「松風亭下梅花盛開再用前韻」に「羅浮山下梅花村、玉雪爲骨冰爲魂」とある。
○雙蛾　女子の眉。徐陵「玉臺新詠序」に「南都石黛、最發雙蛾、北地臙脂、偏開兩靨」とあり、何遜「望新月示同羈」に「今夕千餘里、雙蛾映水生」とあり、李白「春日行」に「三千雙蛾獻歌笑、樝鐘考鼓宮殿傾」とあり、白居易「贈同座」に「春黛雙蛾嫩、秋蓬兩鬢侵」とある。
○惱殺　なやます。殺は助辞。李白「贈段七娘」に「千杯綠酒何辭醉、一面紅妝惱殺人」とある。
○洞宮　道士の居る寺。杜甫「昔遊」に「昔謁華蓋君、深求洞宮脚」とある。
○碧雲　みどりの雲。李白「秋思」に「海上碧雲斷、單于秋色來」とある。
○釋元養　生没年未詳。俗姓は原田氏、法名は元養、道号は百拙、雅号は釣雪・葦庵など。京の人。初め臨済禅に入って大随玄機に師事し、後に黄檗宗仏国寺の高泉に就き、仏国寺第九代となり、海雲山法蔵寺を創建し、近衛家熙や烏丸光広の帰依を得た禅僧である。

34　炎天梅花　　炎天の梅花
　　祇園瑜

| | |
|---|---|
| 幽姿曾愧着炎凉 | 幽姿(ゆうし)　曾つ愧づ炎凉を着るを |
| 勁質寧承従暑傷 | 勁質(けいしつ)　寧ろ暑に従ひ傷たむことを承けんや |
| 日照晴窓宣竹簟 | 日　晴窓を照らして　竹簟(ちくじん)を宣(の)べ |
| 風来水殿帶荷香 | 風　水殿に来たりて　荷香を帶ぶ |
| 玉井伴氷難耐久 | 玉井　氷に伴ひて　久きに耐へ難し |
| 銀雲呈雪不堪粧 | 銀雲　雪を呈(てい)して　粧に堪へず |
| 花神夢覺遊何處 | 花神　夢覺めて　何の處にか遊ぶ |
| 玉砌夜深月若霜 | 玉砌(ぎょくせい)　夜深くして　月霜の若し |

［注釈］
○幽姿　たおやかなすがた。謝靈運「登池上樓」に「潛虬媚幽姿、飛鴻響遠音」とあり、朱熹「秋華・菊」に「青蕊冒珍叢、幽姿含曉露」とある。
○勁質　つよい性質。沈約「詠竹檳榔盤」に「梢風有勁質」とあり、皮日休「虎丘寺殿前有古杉」に「勁質如堯瘦、貞容學舜黴」とある。
○竹蕈　竹に生じる菌。『菌譜』に「竹蕈、生竹根、味極甘」とある。
○玉砌　玉の石だたみ。王融「三月三日曲水詩序」に「鏡文虹于綺疏浸蘭泉於玉砌」とあり、陳後主「東飛伯勞歌」に「雕軒繡戸花恆發、珠簾玉砌移明月」とあり、駱賓王「望月」

に「似霜明玉砌、如鏡寫珠胎」とある。
〇祇園瑜　延宝 4 年（1676）～宝暦元年（1751）。本姓は源。名は瑜、字は伯玉、号は南海・蓬莢などがあり、通称は与一郎。紀伊の人。江戸中期の儒者・漢詩人・画家。14 歳の時から木下順庵の門に入り、同門の新井白石・室鳩巣・雨森芳洲などと交流を深めた。また、紀州藩に仕え、絵画にも秀れ、野呂介石・桑山玉州とともに紀州三大南画家と呼ばれている。著に『一夜百首』『南海先生詩文集』『南海詩訣』『詩学逢原』などがある。

35　梅影　　梅の影
　　新井璵

碧天流月夜如霜　　碧天の流月　夜霜の如く

玉艶寒凝淡淡妝　　玉艶（ぎょくえん）　寒に凝る　淡淡たる妝

羅幌乍飄疎影動　　羅幌（らこう）　乍ち飄（ひるがへ）って　疎影（そえい）動き

微風吹作返魂香　　微風吹きて　返魂香（へんごんこう）と作す

［注釈］
〇玉艶　美しい風采をいう。李商隠「天平公座中呈令狐令公」に「更深欲訴蛾眉斂、衣薄臨酲玉豔寒」とある。
〇淡粧　うす化粧。ここでは梅花が花を咲かせることの喩え。宋楊萬里「克信弟坐上賦梅花」の第二首に「借与南枝作淡粧」とある。妝は粧に同じ。
〇羅幌　うすぎぬの幕。鮑照「代陳思王京洛篇」に「珠簾無隔露、羅幌不勝風」とあり、沈佺期「長門怨」に「玉階聞墜葉、羅幌見聞飛螢」とある。
〇疎影　梅の枝のまばらな姿。宋林逋「山園小梅」第一首に「疎影横斜水清淺」とある。
〇返魂香　香料の名。これを焚けば死んだ人の靈魂を呼びもどすという。『東坡詩集注』に「李夫人死、漢武帝念之不已、乃令方士作返魂香、焼之夫人乃降」とある。
〇新井璵　明暦 3 年（1657）～享保 10 年（1725）。名は君美、字は在中、号は白石・紫陽・天爵堂。通称与五郎・伝蔵・勘解由。江戸の人。江戸中期の学者・政治家・詩人。木下順庵の門に入り学んだ。六代将軍家宣・七代将軍家継のとき幕政を補佐した。白石は詩人としても秀れ、江村北海・頼山陽・原念齋などの絶讃を受け、その詩名は国内はもとより、海外にまで聞こえていた。著に『藩翰譜』、『読史余論』、『西洋紀聞』、『古史通』、『折たく柴の記』、『白石詩草』などがある。

36　桃　　桃
　　室直清

露井桃開照四隣　　露井桃開きて　四隣（しりん）を照し

數枝濃艶雨餘新　　數枝の濃艶　雨餘（うよ）に新たなり

嬌紅媚日花花笑　　嬌紅（きょうこう）　日に媚びて　花花笑ひ

深緑含烟葉葉匂　　深緑（しんりょく）　烟を含みて　葉葉匂し

道士移為仙觀植　　道士移して　仙觀の植と為し

漁翁尋到武陵春　　漁翁尋ねて　武陵の春に到る

従今結實瑶池上　　今従り實を瑶池の上結びて

分與金門待詔人　　分與せよ　金門待詔の人に

［注釈］
○四隣　隣り近所。隣家。盧綸「村南逢病叟」に「雙膝過頤頂在肩、四隣知姓不知年」とあり、陸亀蒙「小齋」に「四隣多是老農家、百樹維桑半頃麻」とある。
○雨餘　あめあがり。唐德宗「重陽日中外同歡以詩言志因示羣臣」に「炎節在重九、物華新雨餘」とあり、韋應物「三臺」に「冰泮寒塘始綠、雨餘百草皆生」とある。
○嬌紅　あかい色。
○深緑　濃い緑。ふかみどり。
○漁翁　漁をするおやじ。杜甫「秋興」に「關塞極天惟鳥道、江湖滿地一漁翁」とあり、柳宗元「漁翁」に「漁翁夜傍西巖宿、曉汲清湘然楚竹」とある。
○武陵　晋の陶淵明、「桃花源記」を作り、太元中、武陵の漁人が溪に沿って行き、偶然桃花の林に入り、更に源にさかのぼって一仙境に至ったことを記す。転じて、世間とかけ離れた別天地をいう。陶潜「桃花源記」に「晋太元中、武陵人捕魚爲業、緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花林、夾岸數百歩、中無雜樹、芳草鮮美、落英繽紛」とある。
○瑶池　神仙の居るところ。美しい池。崑崙山にあり、古、穆天子がここで西王母に会ったという。また、美しい池。李白「上之回」に「但慕瑶池宴、歸來樂末窮」とあり、劉禹錫「同樂天和微之深春好二十首」に「瑶池長不夜、珠樹正開花」とある。
○分與　分けて與える。
○金門　金馬門の略称。揚雄「解嘲」に「與羣賢同行、歴金門上玉堂」とあり、謝朓「郡内高齋閑坐答呂法曹」に「若遺金門歩、見就玉山岑」とある。
○待詔　詔命の下るのを待つ。天子に召し出されて、未だ任命の辞令に接しない間の称び方である。『漢書』公孫弘傳に「天子擢弘對爲第一、召入見容貌甚麗、拜爲博士、待詔金馬門」とある。
○室直清　万治元年（1658）～享保 19 年（1734）。名は直清、字は師礼、号は鳩巣・滄浪、通称は新助・信助。江戸中期の儒学者。室玄樸の子。京都に遊学し、木下順庵に師事した。その後加賀・京都・江戸間を往来し、山崎闇斎門下の羽黒感実にも学んだ。著に『駿台雑話』『赤穂義人録』『六論衍義大意』などがあり、詩文集『鳩巣先生文集』38 巻がある。

37　豊公故壘桃花　　豊公の故壘の桃花

伊藤長胤

叱咤時移覇業空　　叱咤時移りて　覇業空し

百年葵麥動春風　　百年の葵麥　春風に動く

金湯變作桃花塢　　金湯變じて　桃花塢と作り

遠近霞蒸十里紅　　遠近の霞　蒸す十里の紅

［注釈］
○故壘　古い城。昔の城壁。劉禹錫「西塞山懐古」に「今逢四海爲家日、故壘蕭蕭蘆荻秋」とあり、趙翼「赤壁」に「依然形勝扼荊襄、赤壁山前故壘長」とある。
○叱咤　大声でしかる。又、その声。梁簡文帝「長沙宣武王北涼州廟碑」に「指撝則破勍敵、叱咤而静邊塞」とあり、徐陵「爲陳武帝與北齊廣陵城主書」に「叱咤而起風雷、吹噓如倒山嶽」とあり、李白「擬恨賦」に「提劍叱咤、指揮中原」とある。
○覇業　諸侯のはたがしらとなる事業。天下統一の業。袁宏「三国名臣序贊」に「三略已陳、覇業已基」とあり、曾鞏「虞美人草」に「咸陽宮殿三月紅、覇業已隨煙燼滅」とある。
○桃花塢　安徽省貴池縣の西。李白「憶秋浦桃花舊遊」に「桃花春水生白石」とある。
○伊藤長胤　寛文10年（1670）～元文元年（1736）。名は長胤、字は原蔵、号は東涯。別称慥斎、諡号は紹述先生。京都の人。江戸中期の儒者。伊藤仁斎の長男。父仁斎の訓育を受け、父とともに京都の社交界に出入りし、仁斎の学風を受け継いだ。著に『紹述先生文集』21巻、『紹述先生詩集』10巻がある。

38　墻東桃花　　墻東の桃花
　　釋原資
桃花一樹映墻東　　桃花一樹　墻東に映ず
幾度逢春観色空　　幾度か春に逢ひて　色空を観ず
稍覺色空勞幻想　　稍覺ゆ色空　幻想を勞するを
花開花落信春風　　花開き花落ちて　春風に信す

［注釈］
○幻想　とりとめもない考え。幻覚から生じる迷妄な思想。
○釋原資　寛文6年（1666）～元文4年（1739）。号は万庵、別号は芙蓉軒。また万庵原資と呼ばれる。東都の人。江戸時代中期の僧侶。江戸の臨済宗東禅寺の住持。服部南郭や松下烏石と交流があった。著に『江陵集』などがある。

39　園中桃花　　園中の桃花
　　岡吉
去歳園中手自栽　　去歳園中　手自ら栽ふ
今年忽見數枝開　　今年忽ち見る　數枝の開くを
縱然花下無人賞　　縱然　花下人の賞する無きも
獨向春風把一杯　　獨り春風に向ひて一杯を把る

［注釈］
○縱然　もし。司空曙「江村即事」に「縱然一夜風吹去、只在蘆花淺水邊」とある。
○岡吉　生没年未詳。字は士元、美濃の人。

40　源子蘭貯小桃用黄磁斗　　源子蘭　小桃を貯ふ　黄磁斗を用ひ
云是各王母桃請予為賦　　云ふ是れ王母桃と名付くと　予に請ふ為に賦せよと
　　石正猗
海外逢阿母　　海外　阿母に逢ふ

| | |
|---|---|
| 人間有此児 | 人間（じんかん）　此の児有り |
| 偸桃常緑髪 | 桃を偸んで　常に緑髪たり |
| 種實貯黄瓷 | 實を種へて　黄瓷に貯ふ |
| 偏賞株尤小 | 偏（ひと）へに賞す　株尤も小なるを |
| 轉憐枝不支 | 轉（うた）た憐む　枝支へざるを |
| 紫霞花際動 | 紫霞（しか）　花際に動く |
| 薦酔映金巵 | 酔を薦（すす）めて　金巵（きんし）に映ず |

［注釈］
〇人間　人の世。世間。俗界。李白「別有天地非人間」とある。
〇紫霞　むらさきのかすみ。仙宮にたなびく霞。転じて、仙宮をいう。李白「古風」に「至人洞元象、高擧凌紫霞」とあり、白居易「答桐花」に「葉重碧雲片、花蔟紫霞英」とある。
〇金巵　木を円筒状に曲げ、漆をぬった酒器。さかずき。于武陵「勸酒」に「勸君金屈巵、滿酌不須別」とある。
〇石正猗　宝永５年（1708）～宝暦８年（1758）。本姓は尾見、名は正猗、字は仲緑、通称は与右衛門。三河の人。江戸時代中期の儒者。服部南郭に学んだ後、浜松藩士となったが、後に脱藩した。寛保２年（1742）江戸に移り、駒込に芰荷園という塾を開いた。芙蕖社の詩人たちと交際した。著に『芰荷園文集』などがある。

## 注

[1] 日本漢詩における詠梅詩の発展については、拙稿「日本漢詩における詠梅詩の発展」『比較文化研究』、111 号（2014 年 4 月）、pp. 237－244 を参照されたい。
[2] 伊藤栄吉（1747－1796）本姓は塩田、字は君嶺・士善、名は栄吉。江戸時代中後期の儒者である。播磨の人。京都で伊藤錦里に学び、越前福井藩に仕えた。著作に「日本詠物詩」などが見られる。

付記：本稿は天津市哲学社会科学規划青年項目「中国古典詩歌対江戸時期日本咏物詩集的影響研究」（TJZWQN18-005）の段階的な成果である。

## 参考文献

富士川英郎他編『詞華集・日本漢詩』汲古書院,1984.
猪口篤志『日本漢文学史』角川書店,1984.
森忠重『和漢詩歌作家辞典』みずほ出版株式会社,1972.
揖斐高『江戸詩歌論』汲古書院,1998.